

仏心と葬儀 ― その3 ―

捨てる神あれば、拾う神あり

昭和四十三年七月十日、ようやくにして設立された「丸和堂葬儀社」ではありましたが、すぐに経営が軌道に乗るほど世間は甘くありません。すでに釧路市内で営業していたいくつもの同業者がガツチリとシェアを握り、情報網を確立している中へ割って入るといふのは、まさに至難の業でした。

営業を開始した飛田代表は芳栄夫人を電話番号に残し、市内全域を駆け回りましたが、くる日もくる日も一向に仕事を取ることができませんでした。何とも心細い日々でしょう。しかし、亡くなった愛児のためと心の痛手に耐え、転職を認めてくれた妻の支えが、飛田の人並みはずれた行動力のエネルギーとなって燃えたのだと思います。

運命の初仕事

「捨てる神あれば、拾う神あり」のたとえ通り、懸命な飛田夫妻の一念が天に通じたのでしょうか。すでに開業して一年が過ぎようという頃に、ようやく丸和堂に初仕事が舞い込みました。知り合いの父親が亡くなりそうだということを聞いた飛田の友

人が、「もし葬儀ということになったなら、丸和堂にやらせてやってくれないか」と頼んでくれていたためでした。そして間もなく、初めての葬儀依頼が飛田のもとに飛び込んできたのでした。

なにせ初めての仕事ということもあり、飛田は葬儀代金の見積もりを「三万円」と先方に告げましたが、葬儀を終えてみると何と経費が四万円もかかっていることに気がきました。まさに「見積もりが甘かった」のです。しかし、いったん三万円と約束した以上、それでいいと依頼主に申し出たものの、「それでは気の毒だ」と、寸志として三千元を渡そうとします。飛田は固辞するものの、相手が「これを受けとらないならば、代金の三万円も払わない」と言うに及んで、やむなく受け取ることになりました。それでもすっきりしない飛田は帰り道、近くの菓子店に入って千円ほどの菓子折りを買って引き返し、「お子さんと食べてください」と差し出すと、驚いた依頼主も今度は快く受け取ってくれたため、飛田は安堵の胸をなでおろしたのでした。

つづく

■ 次回の掲載は

十一月二十二日(土)を予定しております。